

植民地主義と女性文学の二つの道

——ナエジヨシヒ 崔貞熙とナハリヨシ 池河連——

李 相 瓊
波 田 野 節 子 訳

【要旨】本稿は、文学者の戦争動員が本格化した植民地時代末期の、崔貞熙と池河連の創作活動を考察することにより、植民地主義と女性文学との関係を明らかにすることを目的としている。植民地状態からの解放と家父長制の抑圧からの解放という二つの目標を同時に追求した植民地の女性にとつて、〈女性主義〉と〈民族主義〉はともに受容し妥協させていかねばならない多面的な対象であった。崔貞熙は、〈国策〉とあまり関わらない男女の恋愛を主題として、現実順応型の父系中心主義と〈母性〉が勝利する小説を書き、その延長線上で〈国策〉に呼応する〈銃後の婦人〉のさまざまな姿を描いた。一方、〈国策〉とは無関係のように見える男女の恋愛問題をあつかいながら男性の自己中心主義と彼らの現実妥協的な姿勢を批判した池河連は、つづいて植民地末期を生きる知識人の姿勢を問題にした作品において、無為の人生を選択して社会から自分を閉め出す憂鬱で絶望的な人物を愛情をこめて描きだした。男性中心主義によつて現実に対応した崔貞熙が植民地末期に軍国の母性の称揚へと向かったのとは対照的に、女性の自律性を擁護した池河連は、外部との関係を断ち切って自らを幽閉する憂鬱で病弱な人物の内省的な世界を掘り下げてから、結局、絶筆することで〈時局〉に対する非協力の姿勢をたらぬいたのである。このように崔貞熙と池河連の作品世界を比較することで、植民地において女性主義的意識に忠実であることが、民族意識の確かさへとつながることが明らかになった。

一. はじめに

本論文は、一九三〇年代後半の中日戦争以後、文学者の戦争動員が本格化した時期⁽¹⁾における女性作家のなかから、とくに崔貞熙と池河連の創作活動を対象にして、植民地主義と女性文学の関係を明らかにしたものである。

一般的に、近代女性の解放は、国民国家建設という公的領域に参加することから始まる。公的領域への参加は、同等な公民権の獲得という平等性の強調の方向に向かうこともあれば、差異を強調して国家に対して母性保護を要求する方向へと向かうこともある。どちらにしろ、女性は国民国家という公的領域に参加することによって、封建的な抑圧からの解放を目指すのであるが、国家主義という領域に閉じ込められてしまうと、他民族への抑圧に加担し、結果として、自らも解放されないことになる。植民地の歴史を見ると、民族主義が女性を宗主国の西欧的近代化に対抗する民族の象徴としてまつりあげて伝統的な抑圧状態におしとどめたり、伝統に回帰させたり、民族解放闘争の場でもいわゆる女性の役割しか与えなかつたり、いざ解放の日が来たときには女性をふたたび固定役割に追い返したりすることがおこり、このような経験から、女性解放を求める〈女性主義〉は〈民族主義〉や〈国家主義〉をのりこえる必要があるという主張がなされるようになった。

しかしながら、こうした主張には、〈女性主義〉と、民族主義に代表される〈反植民地主義〉とを対立させる危険性がある。植民地の女性性は、植民地状態と家長制の二つの抑圧からの解放を同時に追求したのであり、それは、〈女性主義〉と〈民族主義〉の双方とも受けいれて妥協させていかねばならない多面的な過程であつた。

この過程で生まれた女性文学も同じように多面性をおびることになり、作家たちが抱いた男女差に対する認識とその解決方法に関する展望の相違は、植民地主義をどう認識し、どう克服するかの方法に関する相違としてあらわれることになった。この相違は、日本が植民地朝鮮で内鮮一体の同化政策をおしすめて、女性まで戦争に

動員していくようになった一九四〇年代前半に、とくに明瞭にあらわれる。

〈母性〉という既存倫理(家長制が女性に求める資質)と、〈女性〉という覚醒した主体の要求(女性自身の欲望および自己決定の可能性など)に亀裂が入る地点にいたったとき、女性作家のなかには、既存倫理と妥協して亀裂を縫合しつつ、軍国の母性、へとたやすく移っていった者もあれば、自立的な女性の生き方を追い求めて家長的秩序を根源から批判しつづけた者もいた。そして、後者の場合には、植民地主義への抵抗もまた確固としたものとなった。前者の代表的なケースとして崔貞熙、後者のケースとして池河連をとりあげ、この二人の創作活動を比較することで、徹底した女性主義が植民地主義に対する抵抗へとつながることを明らかにしたい。

二. 植民地時代末期における女性文学の課題

この時期の女性文学の状況をみると、第二期の女性作家のうち朴花城、姜敬愛、白信愛はもはや創作活動を継続しえない状況であり、崔貞熙、李善熙、張徳祚⁽²⁾らが多く作品を発表し、新進作家として池河連、任淳得、林玉仁⁽³⁾が登壇して活動していた。詩人としては毛允淑、盧天命が活動している⁽⁴⁾。ところで、この時期の女性文学については、これまで崔貞熙、毛允淑、盧天命を中心に論じているのが一般的であつた。一九三〇年代前半に登壇してすでに文人としての地位を固めていた彼らは、雑誌社や放送局、新聞社の記者として作品発表その他の社会活動をおこなってジャーナリズムにさかんに登場しており、その後も解放と朝鮮戦争をはさんで、大韓民国における女性文壇の中心となつたからである。とくに崔貞熙は、肯定的な意味でも否定的な意味でも、いわゆる〈女流作家〉の代表であり、植民地時代から大韓民国の文学史において〈女流文学〉が論じられるさいには中心的な対象となつている。

ところが、植民地時代末期の崔貞熙、毛允淑、盧天命らの活動が日本に積極的に協力する結果となつたために、

〈親日文学〉を論ずるさいには、この女性文人たちの名前がしばしば前面に出ることになった。著名な女性文人がすべて〈親日協力〉の道を歩んだという事実は、女性として思考することと民族構成員として思考することは必然的に背馳するという主張の有力な根拠となった。そして、〈民族主義〉の立場からは、女性問題は民族を分裂させるものだという批判がおこり、〈女性主義〉の立場からは、女性作家の親日文学には民族の虚弱なエリート男性に反発する「根源的なフェミニズム感情」の側面があることを考慮すべきだ、という主張もなされた。しかし、この議論は、この時期の女性文学を〈女性主義〉と〈民族主義(国家主義)〉とに二分する既存の枠組みで裁断し、具体的な考察をおろそかにしているために起こったものである。新進作家といえる任淳得⁶⁾と池河連の作品を見れば、〈女性〉であることの強調は〈民族〉の問題を考へることとまったく背馳していない。任淳得の登壇作品は民族的な現実という脈絡のなかで女性問題を描いており、彼女が日本語で著したいくつかの小説も、植民地主義に抵抗する姿勢をもって新しい〈女性〉と〈母性〉の形を追及したものであった。ただ、任淳得は登壇作品「日曜日」〔朝鮮文學〕一九三七・二)以外では、恋愛や夫婦関係などの男女関係を直接あつかっていない。その点、結婚後の男女の関係素材として、男性の〈自己中心主義〉をあばきだし、徹底した〈女性〉の目によって植民地時代末期の知識人群像を描いた池河連の作品は、任淳得の作品とは違う側面から、ファシズムの時代を〈女性〉として生きぬくことの何たるかを示している。

池河連が作家として登壇したのは一九四〇年十二月であるが、このとき日本はすでに戦時総動員体制を取りはじめていた。一九三九年十月に結成された朝鮮文人協会は、作家たちを「国策」に積極的に協調させ、各種の宣伝に動員させるために作られたものであった。それまでの日本は、検閲を通して植民地朝鮮の作家たちに、何か、書くなど強要してきたが、この時期になると一歩進んで、総動員体制の宣伝となるような、何か、を書けと強要し始めたのである。両方とも作家にとっては抑圧以外の何ものでもないが、それに対する抵抗方法はさまざま

であった。検閲によって、何か、を書けないように抑圧を受けたときの抵抗とは、いかなる妨害にもかかわらず、何か、を書いて伝達することである。書きたいことを書けないどころか、気が進まない、何か、を書けと強要される状況において、作家の抵抗は、表向きは強要されたものを書くようなふりをしながら裏では別のことを語るか、時局とはまったくかわりがない話を書くか、でなければ最初から何も書かず沈黙することである。

朝鮮文人協会結成後の崔貞熙と池河連の創作活動を見ると、崔貞熙は一九四〇年十二月から一九四五年までに、〈親日〉的な小説六編をふくむ十編の小説を発表している。一方、一九四〇年十二月に短編小説「訣別」で登壇した池河連は、一九四三年までに全部で六編の短編小説を発表している。朝鮮文人協会以後の崔貞熙と池河連の作品発表状況を整理すると、以下の通りである。

年度	崔貞熙	池河連 ⁽⁷⁾	備考
一九三九	「地脈」(「文章」一九三九・九) 「肖像」(「文章」一九三九・十)		十月二十九日：朝鮮文人協会結成
一九四〇	「人脈——별의傳説」(「文章」一九四〇・四) 「甘斗」(「家庭之友」一九四〇・四六) 「寂夜」(「文章」一九四〇・十二)	「訣別」(登壇作「文章」一九四〇・七)	十月十二日：朝鮮文人協会所属文人、陸軍志願兵訓練所を訪問

一九四一	「幻の兵士」(日文、「國民總力」一九四一・二) 「天脈」(三千里一九四一・一〜四) 「靜寂記」(日文翻譯「文化朝鮮」一九四一・五) 「白夜記」(春秋一九四一・七)	「滯郷抄」(文章)一九四一・三 「가을」(朝光)一九四一・十一	十二月七日…真珠灣攻撃
一九四二	二月十五日「夜」(日文、「綠旗」一九四二・四) 「黎明」(野談)一九四二・五 「薔薇의 影」(大東亞)一九四二・七 「野菊抄」(日文、「國民文學」一九四二・十)	「산길」(春秋)一九四二・三	二月十五日…シンガポールを陥落 五月…一九四四年より朝鮮で徴兵制を施行することを決定
一九四三	*この年、少なくとも五編以上の「親日協力」の文章を発表	「從妹—지리한 날의 이야기」 「羊」(春秋)一九四三・五	四月十七日…朝鮮文人協會、朝鮮文人報国会に改編される
一九四四	*この年、少なくとも五編以上の「親日協力」の文章を発表		
一九四五	「徵用列車」(半島の光)一九四五・二		

一九三九年十月の朝鮮文人協會結成から、池河連の最後の小説が発表される一九四三年五月までの間に、崔貞熙は八編、池河連は六編の小説を発表している。⁽¹⁰⁾この時期の崔貞熙は、「国策」と関係がない男女の恋愛問題を

主題として、因習的な現実に順応する父系中心主義と〈母性〉の勝利に終わる小説を書き、やがてその延長線上で、「国策」に呼応する「銃後の婦人」たちが登場する小説を書いた。一方、池河連は、「国策」とはまったく関係がないように見える男女の恋愛問題を描きながら、男性の自己中心主義と彼らの現実妥協的な姿勢を批判し、さらに植民地時代末期を生きる知識人の姿勢を粗上にして、無為の人生を選択して自らを社会から閉め出す憂鬱で絶望的な人物を、愛情をこめて描きだした。この点で、池河連は崔貞熙と対照的である。小説だけでなく随筆等においても、崔貞熙は「文士部隊斗 志願兵」(三千里一九四〇・十二)、「君國의 어머니」(大東亞)一九四二・七)、「軍國母性讀」(半島の光)一九四四・七)のような時局の要求に応える文章を多く発表した。池河連の方は、「통김치 (株漬けキムチ)」(新時代)一九四一・十二)、「저울이 가을 들랑 (秋が行ったら)」(朝光)一九四二・二)、「姫列」(新時代)一九四三・七)などのように、時局的な色彩がまったくない個人の日常を語る文章だけを書いた。

三、植民地主義に順応する女性文学——崔貞熙

(一) 葛藤を縫合する現実順応型的女性主義

崔貞熙は全州事件で検挙され、九ヶ月間の獄中生活を送ったのち、「凶家」(朝光)一九三七・四)を発表した。一九三〇年代前半には階級的・社会的関係の中における女性の生き方を描いていた彼女は、この作品で、夫や息子という家族関係の中で孤立する女性話者の内面の声を描くことに力を注いだ。そして、この作品が好評を得ると、女性話者の告白という手法で「靜寂記」と「人脈」を創作し、つづく「地脈」と「天脈」でも女性登場人物の複雑な内面描写に力を入れた。

「靜寂記」は、女性の経験、の真率な記録である。夫を憎んでいる、私は、夫の実家に対して子供を連れて

いくようにと言う。内心では子供を渡す気などなかったのに、やってきた義母に子供は自分で育てなさいと言われると、発作的な怒りにとらわれて子供を渡してしまい、そのあと子供への思いにさいなまれるという話である。息子を渡して後悔する母親の気持ちだけでなく、カッとして、本心とは逆に行動する、微妙な女性心理、や、欲望に反することを運命とみなしてそれに順応する不合理な姿勢は、崔貞熙の「女流らしさ」の基調であり、一九三〇年代末の「女流文学」を論ずるさいに基準とされている。

「地脈」(一九三九・九)は、「母性」と父系の血統を優先させて、女性としての欲望(愛欲)を放棄する話である。은영は、夫が死んだあと子供二人を連れてあらゆる苦勞をなめながらも、은喜の求婚を拒否する。子供たちの姓を変えるわけにいかないし、은喜が義理の息子を愛してくれるかどうか、信じられないからだ。「人脈」(一九四〇・四)もやはり、愛欲のために彷徨しながら、結局は「母性」によって愛欲を押し殺す話である。선영は友人の夫である糾을を愛してさまようが、玉突き玉みたいな女性になってはいけないという糾을の言葉に、ふたたび家へ、夫の傍らへと戻っていく。そして、子供が生まれるとその子に夫ではなく糾을の面影を見て、この子のために生きようと思う。「天脈」(一九四一・一〇四)は、子供のためにした再婚がかえって子供を苦しめるようになる、子供をつれて教師として保育院に入り、自分の子供に対する愛と保育院の院長に対する愛を、保育院生たちへの愛に昇華させるという内容である。このように「三脈」シリーズの女性主人公たちは子供のために男性への愛を放棄する。

これら崔貞熙の女性主人公たちは、教育程度や生活様式から見て一九三〇年代の新女性であるが、彼女たちには、既存の倫理と秩序からいったんは逸脱しても、自己の欲望を押し通すことなく支配言説に順応して男性中心の關係にもどってくるという、「男性中心主義」がはっきりと表れている。⁽¹¹⁾このような現実順応型(「女性性」)を基盤にして彼女たちは、「国策」が求める「銃後の婦人」と「軍国の母」へとたやすく移っていくことになる。⁽¹²⁾

(二) 男性中心主義から国家主義へ

日本男性と朝鮮女性の恋愛を通して内鮮一体の理想を表した崔貞熙の小説「幻の兵士」(一九四一・一)では、男女が互いの個人的な理解を基盤にしながら、その共感の幅を互いが属している共同体にまで広げていくのが、内鮮一体の道であるとされる。こうした論理は、朝鮮的なものを無くして日本人と完全に同じになるとき朝鮮人に対する差別はなくなるはずだという、李光洙式の内鮮一体論とは違っている。だが、個人を通して相手の属する共同体全体を感じとり融合していくという恋愛の最大値を語りながらも、日本男性である山本は、それによって東洋全体を自分のものであるように感じるし、朝鮮女性である英順は日本が遂行している戦争を自分自身の戦争と感ずる。女性の犠牲と献身という美名のもとで、その戦争にまきこまれて犠牲となる植民地の運命を糊塗しているのだ。

「黎明」(一九四二・五)では、西洋人が経営する女学校で学んだために、西洋人である校長と英語への思いから、日本が叫ぶ「鬼畜米英」に容易に同調できないでいる糾을を、同じ経験をもつ女学校の同窓生은영が説得する。学校で徹底した軍国教育を受けている子供たちのために、子供たちが何の疑いもたずに学校生活をりっぱに送って皇国臣民として堂々と育つことができるよう、「軍国の母」の役割を受け入れなさいと、은영は糾을を説得する。⁽¹³⁾

「二月十五日の夜」とそれを拡大した「薔薇의 집」は、家庭内の仕事に忠実であれと要求する夫に逆らって、シンガポール陥落を契機に、妻が愛国班の班長の仕事を引き受けるという話である。以前の「新女性」を、贅沢と虚栄にまみれて家庭をかえりみない悪い女だと決めつけている点では、妻も夫も同様だが、夫が妻にむかって、出歩かないで家にいるように言うのに対して、妻は、愛国班の活動は家庭の仕事をちゃんとやりながらも可能であり、「国民」として女性が当然なすべきことだと主張している。一九二〇年代の初めに羨望と嫉妬の対象で

あった「新女性」が、社会的に批判されて退くことを余儀なくされ、女性たちがあらたな活動を模索しているこの時期に、自発的に戦争動員に参加することに意欲を見せる女性の姿が興味深い。とはいえ、その参加の具体的内容が、女中をやめさせて家事を自分がやることで節約し、同じことを別の家庭にも勧めるといふ愛国班活動に限定されているという点に、崔貞熙式の家族中心主義と順応主義が見られる。

「野菊抄」(一九四二・十一)は自分を捨てた男の息子を生んで育てている女性が、息子といっしょに志願兵の訓練所を見学したあと、強い母になることを誓うという内容である。息子が勇ましい軍人に育つことができるよう、女性自らが息子の死にも涙を流さない、軍国の母に生まれ変わろうとするのは「黎明」と同じだが、ここではそれによって自分を捨てた男性に復讐し、彼から抜け出そうとしている。

崔貞熙が植民地主義の総動員体制に協力して書いた作品に登場する女性たちの態度は、それ以前の時期に崔貞熙の作品に登場していた女性たちの男性中心主義と内的な関連性をもっており、この点に、崔貞熙の女性文学における問題が露呈している。そのうえ崔貞熙の女性主人公たちが回帰している「母性」には、さらに大きな問題がある。「三脈」だけでなく「黎明」においてもそうであったが、崔貞熙の男性中心主義においては、子供たちは副次的な存在である。崔貞熙小説の女性の子供を独立した個体とは認めず、別のもの——夫あるいは恋人——の代替物として見ているのである。「野菊抄」の最後の場面はそれを如実に示している。

私は子供の手をもつとしつかりと握つてやりました。子供も握られた手で私の手を握り返すのです。その力強い手の感触はあなたに握られて丸木橋を渡った時と違ふ力強さでそれ以上に私に希望を持たせる手です。それ以上に私に喜びを與へる手です。

(……)

もう私は何も考へず勝一を育てると同じく勝一のために野菊花を美しい花、強い花に育てることに致しませう。それが私に対してのあなたに対しての復讐となりませうから。さようなら。

息子の手を「あなた」の手の代わりにし、「あなた」に対する復讐として、自分が強い母になって息子を皇国の兵士として育てるといふのが、崔貞熙作品の「母性」の帰着点である。女性が子供を通じて男性すなわち子供の父親に復讐するという考えは、すでに「救象」(一九三八・八)において、その問題を露呈している。三年間だけ苦労すれば金を稼いで帰ってくるといつていた夫の引返は、アヘン中毒になって帰ってきた。針内職をしなから息子の早午を育てていた甘いは、最初は夫が帰ってきただけでもうれしくてあれこれ世話をやくが、事実を知ったあとは、夫を憎むあまり、息子が夫に似ているところを見つけては理性を失い、息子をぶつては後悔するといふ行動をくり返す。心の中では「この子をちゃんと育てて夫に復讐してやる」とつぶやきながら、実際には、夫へのうらみから子供を虐待するのである。ところが、母親のこんな心を知る由もない息子は、自分の母親を継母だと思ひこみ、本当の母さんのところに送つてやるという父親の言葉に騙されて、金持ちの家に売られていく。息子が金持ちの息子の病気の治療のために死ぬであろうことを暗示しながら、小説は終わっている。この悲劇の核心は、甘いが息子を見ながら夫を思い浮かべ、息子を通して夫への復讐を夢見ているところにある。甘いにとっては息子自体が愛の対象なのではなく、息子は夫の代替物なのだ。息子を憎むのも、息子がその父親にそっくりの仕事をやるからであり、息子をりっぱに育てようとするのも、夫とは違う人間に育てようという思いからである。こうした心理が、現実には息子をぶつたり仕事のしすぎで虐待したりの形であらわれ、ついには息子を死へと追いやる。

ここには崔貞熙の「母性」の特色があらわれている。子供はつねに、男性か、それに代表される理念の代替物

なのだ。〈母性〉は子供への命がけの愛情というよりも、その子供が表象する別の何かをめざしている。そして、戦時学校教育によって子供が国家主義イデオロギーを体现するようになる。夫の身代わりだった子供の場所には、子供が表象する国家主義がたやすく入り込むことになる。崔貞熙小説におけるこのような〈母性〉の性格を、自身も作家であり評論家であった任淳得は、次のように評している。

(崔貞熙の作品では——引用者) 女が一人で生きぬく時につきものの、精神生活と物質生活の両面における摩擦——不安、動揺、懊惱を追及しようという誠実さが見られたかと思うと、氏はいつのまにか巧妙に〈母性〉という美名の下に隠遁所を作っている。隠遁所に隠れるのは氏の自由であるが、とぼつちりを受けるのは子供——生命とも同じ子供である。私たちの理想の母親は、自分の不幸を一度だつて子供の前で誇張したりこぼしたりしたことがないことを思うと、崔氏の追求する母性愛に慣らされた子供の将来が憂慮されるのである。⁽¹⁶⁾

この女性評論家が憂慮した「子供の将来」は、「野菊抄」において、皇国臣民の兵士となって母の見送りを受けながら死地へ赴くという形で現れる。

このように、崔貞熙の女性人物たちはつねに男性を中心に置いて思考し、〈母性〉と〈女性〉の葛藤を男性中心の母性によって縫合する。つまり、既存の女性像と妥協しながら葛藤を無化あるいは縫合する傾向が強いのである。⁽¹⁷⁾

四、植民地主義に立ち向かう女性文学——池河連

(一) 男性の、自己中心主義、と、卑屈、批判

池河連が誌面にはじめて登場したのは、新式の母親について書いた短い文章、「나의 거문고——자식에 대하여(私のコムゴ——息子について)」、「女性」一九三九・四) によってである。新式の母親たちが子供に厳格すぎたり過保護になったりすることを批判して、子供を独立した個人として尊重するよう希望するという内容だが、これは子供に対して母親の別の欲望を投影してはならないということである。これ以後の池河連は、小説や随筆で〈母性〉についてまったく言及していないので、これが現在のところ〈母性〉についての唯一の言及ということになる。⁽¹⁸⁾ 子供を独立した存在として尊重すべきだというのは、きわめて一般的な育児論と見ることもできるが、崔貞熙式の〈母性〉とは距離があることも、また確かである。

池河連が公人として〈女性問題〉について発言しているのは、一九三九年九月のある座談会の席上である。作家として登場する以前、池河連は、林和氏夫人李現郁^{イムフッ、イヒョンヨク}の名前で「男性爆撃座談会」⁽¹⁹⁾に参加した。男性の身なり、男性の家庭生活、男性の愛し方について、女性が男性を批判する座談会であったが、この席で李現郁はもともと多く、また積極的に発言しており、話し好きで闊達だったという池河連の面影⁽²⁰⁾を見ることができるといえる。

この席上、池河連は男性一般を批判しているが、その核心は、彼らの、自己中心主義、と、卑屈、そして、弄女主義、であった。夫に対する不平を話すようにという司会者の注文に、池河連は、「家庭の男性といつても、取り立てて話すことなんかありません。結局は、自分たちの恥になるんですもの。一番見苦しいのは、自己中心主義だわね。主張や解釈を見れば、どれもこれも自分中心なんですから」、「あの細かな利害観念から滲み出る自己中心主義ときたら、本当にみっともなく、とても話になりませんわ。いつもこちらの方があきらめて、平和

を維持しているだけなんですよ」と、率直に話している。男性について軽蔑したい点はないかという司会者の質問に対しては、「あまりに自己中心に考える」こと、「卑屈」で「どこまでも情熱をつくす勇氣がない」ことをあげている。また「男はもともと自尊心が強いですからね。自分を価値以上にみなすところに悲劇が存在するので。女はもともとセンチメンタルなものですから、気に入った人がいれば忌憚なく接するの、そうすると男は反対に、すぐそれを物質的に、つまり現実的に感受します。本当にかわいそうなものですわ」、「本来女は生理的に違っているのに、それなのに苦勞は全部女にだけ背負わせようとするのが、そもそも間違っているのです。だけど、女をそんなふうにした弱性として見下す弄女主義も、ひどく気に障ります」と言って、男性の自己中心主義からくる女性軽視の風潮に苦言を呈している。

この座談会を念頭において池河連の小説を読むと、より明瞭に解釈される部分が多い。池河連の登場作品である「訣別」は、男性のこの「自己中心主義」と「卑屈」を正面からあばいた作品である。「訣別」では、형예が夫に他の男性(友人정오의夫)に心を奪われたことを告白すると、夫は平然として「わざわざ波風を立てて何になる。たいしたことでもないのに大騒ぎするな。俺は何も言わん」と言う。妻が命がけで考え、やっていることを、夫は自分に都合のいいようにしか解釈しないという「自己中心主義」を露呈したのである。「寛大で人望があつく心が深い、立派な夫」が、またとなく愚劣で、ひどく卑屈な精神と方法をもった恐ろしい人間である。「寛大」で問題の本質に直進することを避ける「卑屈」な男性と完全に訣別する「偏狭」で「情熱」的な女性の孤独が描かれている。

池河連小説の女性登場人物は「孤独」を感じても、「母性」や家族制度の安定性によって孤独を和らげようと、葛藤をつくるおうとは考えない。池河連の作品はむしろ、表面上は平和に見える夫婦の裏面に、男性の「自己中心主義」によっていつ壊れるかもしれない不安定性があることをあばくことに焦点が置かれているのである。⁽²⁾

「가을」は妻の友人정예から愛しているという告白をうけた男性석재が自らの「卑屈」を自覚して自己を批判する作品である。妻の生存時から정예は석재に手紙を送って会おうと言うなど、自分の感情に率直だった。だが석재は정예の情熱と向き合うことを避けてしまった。しばらく消息がなかった정예が、妻が死んだあとに押しかけてきて、「ひどく不愉快でずうずうしい私ですけど、一人の方の前でだけお話ししたかったです」と言って告白したとき、석재は、정예は「凶悪」ではあっても「卑屈」ではないと考える。そして、こんな정예は例外的な存在で、「多くの女性が、精一杯卑屈であることによって凶悪であることをようやく免れているのなら、女性は永遠に美しくあつてはいけないことだろうか」と考える。

ここで作家池河連は、「卑屈」の対立概念として「凶悪」を立てている。この場合、「卑屈」とは自己の欲望や情熱を最後まで追及せずに中途半端に妥協することであり、「凶悪」とは自己の欲望や情熱を追求しながら、現実との葛藤のなかで敗北することだ。これは、われわれの日常的な単語の使い方とは違っている。池河連の「凶悪」は、たんなる否定的な意味あいではなく、むしろ、作家が共感し肯定する人物の鬱屈気を表現する言葉である。作家は肯定的に考えているが、他の人たちは簡単には共感してくれないどころか、むしろ否定的に見ている。そんな性格を表向きには非難するふりをしながら、遠まわしに擁護する単語である。この小説で作家池河連は「後悔しない顔——冷やややかで明るい目で行為し、その目で明日を避けない顔」や、「一少女の唐突な欲望が、これよりずっとときびしい現実で破れた、その廃墟」に対して「凶悪」という単語を使っているが、これらから見ても、彼女は、女性が自己を主張して個性を追い求めることが、一般男性や慣習的な視線には「凶悪」に見えるであろうことを客観化して提示したのである。⁽²²⁾そして、석재に、自分こそ가정예の熱情を回避した卑屈な存在だという事実を、冷たい秋の風にあたったかのごとく鮮明に悟らせることで、男性自身の「卑屈」をあばいたのだ。

「산길」の主人公全재の夫は、「生活の秩序」を大切に、「近づいた不幸を乗り越える知恵」を備えた人物である。友人연희と関係をもった夫は、全재に向かって、自分の行動が過ちであったにしろ恋愛であったにしろ「してはならないこと」であったとして、謝罪してなだめようとする。妻が「あなたは、あの人に対しても私に対しても悪い人間」だと非難すると、夫は、それもその通りだといって軽く受け流そうとする。この事件で全재と연희の二人の女性が受けた傷には無関心なまま、夫は、「經驗」を一つ積んだだけだという態度なのだ。

この小説で、妻全재と愛人연희の二人の女性が一人の男をめぐる交わす対話には、自由恋愛と結婚制度が衝突したときに、自由恋愛を理想とする女性はどうしたらいいのかという悩みが見られる。

「연희は―引用者」あの人、自分の生活の秩序を誰よりも大切に思っている人です。たとえ私をあなたよらずと愛していたとしても、決して、それを実際に口にすることはないでしょう」と言つて話し続けた。こうなれば、何だつて言えた。

いまや全재は慌てていた。というより、そもそも何でこんな話をしているのかわからないのだ。不幸なことに、彼女は辱められても言い返すことができなかつた。ふだんの夫の性格からして、それが本当かも知れないからだ。

全재が急に黙り込んだのを見て연희は、今度は、

「妻であることが幸せだと思つているの」

と言つた。

全재はこれ以上耐えられなかつた。

「そんなこと、夢にも思つていないわ」

「本当なの」

「ええ」

「なぜ」

「妻でないあなたと、まったくの同位置に並んでみたいから」

「自由な選択があると思うのね」

「ええ」⁽²³⁾

こうして女性たちは「自由恋愛」の原則を最後まで追及しようとするのに対し、男性は彼女たちに「君らは神聖なる恋愛主義者だな」と嘲笑し、また恋愛とは「分別のある人間が長くやっていられないこと」であり、「大人とは、まったく別のことに沢山の時間を費やす忙しい」人間だと言つてごまかそうとする。こんな夫を全재は「絶壁断崖に蹴落したつて、どんな手を使つても這い上がつてくる人」だと思つた。そして妻は沈黙によつて夫婦生活を「平和」裏に維持するが、内心では、自分の感情をはつきりと出して行動した友人연희こそが「誰より誠実で正直だった」と考えるのだ。この小説では、男性は夫としても愛人としても不誠実で、世界を自分に都合よく解釈する人物であり、女性は妻の座にいても愛人の座にいても、男性によつて傷つけられる存在である。

こうして池河連は完全に女性の立場から、男性の利己的な「自己中心主義」と原則なき「卑屈」を暴き出し、個人の欲望や情熱や原則に忠実で周囲と妥協しない女性の自律性を追い求めた。これが、池河連がこの時代に望んだ女性の姿勢であつた。

このように、時局とは一見まったく関係ない男女間の恋愛に關しても原則を守る「凶悪」さを擁護した池河連の〈女性〉的な視線は、戦時動員体制に卑屈に妥協する人物への批判へとつながっていく。生産的で健康的で明

朗な文学を要求する戦時総動員体制の下で、池河連はそれとは正反対に、役に立たず、病弱で憂鬱な人物たちの、退屈な日の話⁽²³⁾を書くことによって、抵抗の姿勢を明らかにするのである。

(二) ファシズムに立ち向かう〈女性主義〉

池河連の小説は、発表された時期が一九四〇年から一九四三年の間であることを念頭において読まねばならない暗号だらけの文章である。登壇の所感を述べる席上、池河連は、書きたいことを書けただけでなく書きたくないことまで書くよう強要される状況(押しつぶされ、拘束され、片目を失くした者)であるが、それでも最善をつくして真実を見(目を曇らせず)、抑圧されて苦しむ人々を文学にきちんと描いて、人びとに共感をいだかせたい(ぞんざいに扱わないようにする)と述べている。

ですが、私は大したことがありませんから、色彩豊富で、燦爛として、生き生きとした文学など、とても書けそうにありません。いくら私がそれを望んでも、とうてい無理としか思われません。

私に何かがあるとすれば、せいぜいのところ、押しつぶされて拘束された目でしょう。もちろん、私のこの目が、何を見てどう受け入れるかはわかりません。ただ願うのは、私の片目ができるだけ曇らないこと、そして、ひどい目にあつてすつかり生氣をなくしている私の人間たちを、あんまりぞんざいに扱わないでくれたらと思うだけです。(太字は作家による。以下同様)⁽²⁵⁾

その時代を生きる知識人の姿勢を主題とした作品「滞郷抄」「従妹」「羊」は、男女の関係を主題とした先の作品とは違つて、時代を迂回する発言として、少し念入りに読む必要がある。これら三つの作品には、同じく、不

幸な、過去をもちながらも時代に向き合う姿勢が異なる二人の人物が登場する。一方は愚かで偏狭で自閉的で生気のない性格で、くだらない人生を選んだ人物、もう一方は利口で寛大で豊かな性格で、りっぱな人生を選んで世間に出ていく人物である。まず、「滞郷抄」の三熙は、兄の生気のない人生に自分と同質のものを感じて尊敬の意を表する。つぎに「従妹」では、碩熙が従妹の貞媛の葛藤を見守る。最後の「羊」の成在は、まわりの人びとすべてに背を向けられ、完全に孤立した状態で無力感と絶望を感じる。そして、ここで作家は絶筆する。

「滞郷抄」は、健康のために実家に療養しにきた三熙の目で、兄とその友人泰日を比べている。いつとき不幸なことを経験した兄は、世の中に対して嘲笑的で傍観的な態度を取りながら豚を飼ひ、畑仕事に没頭している。三熙の目には兄は偏狭だし、泰日はなんでも包みこむことができる、厚みのある人間、に見える。兄の自画像は、頭が際立って大きく、手足が病人みたいに痩せこけて、いるのに対して、泰日の自画像は、髪の毛が太くヒゲが濃く、目がいよいよ輝いて、いる。

そんな泰日が構築したのが大人っぽい、男性の世界、なら、兄の世界は偏狭で、小さな創造物、の世界である。

「やっぱり泰日君のような人間が、生きている人間なのかもしれん」

(中略)

「誇りがあるからさ。生命と肉体と、それに立派な男だという誇りがあるからだよ」

と兄は言った。三熙は兄のこんな言葉には答えようもなく、心の中で男、生命、肉体とくり返してみたが、だからといって、それが彼女に特別の感動を与えたわけではなかった。兄はふたたび、

「あいつは、自分に関わるいっさいを自分の意志の下におきたいという野心をもっているくせに、そのために卑劣になることもないし、何に対しても排他的ではない……いわば豊かな性格さ。それに、こういう性格

がそもそも男性の世界だから……」⁽²⁸⁾

「兄は」(「前略)しかし、その子供っぽいところが、あるいは愚かしいところが……いわば、きわめて広くて、完全に豊かなものと通じるものだったら?」

と言いながら、

「こんなものは全部、お前らの小さな創造物かもしれないな」

と、またもや冗談のように笑った。三熙はなんとなく不快だった。何かを侮辱された時のようにいきなり不快になったというより、兄に対する不思議な疑いが、ある種言いようのない不快感をもたらした。そういえば、なんだか顔が白くて体がぎしゃしゃなこととか、手足がきれいなことまで、全部疑わしかった。それで、「とても善良な人は、自分ではその善良なことを知らないはずよ。兄さんも知らなくてあたりまえなのに、知っているなんて、どういうこと」

と、わざと冗談口調で言ってみた。すると兄はまるでつまらなそうに、

「じゃ、お前もあの小さな創造物の一つってわけか」

と言いながら、

「そうかもしれない……」

と言った。少しあと、三熙は自分の部屋に戻ろうとして、ふと兄のへんてこな姿を思い浮かべた。

いわゆる巨人も死に天使も今は去ってしまった騒がしい市場の息子に生まれつき、小さくみすぼらしく育って何に対してもけち臭く、そのうえまた故郷を離れて、ますますぶざままで滑稽なありさまであった。しかし、三熙はこんな姿にむしろ情が湧くのをどうすることもできなかった。⁽³⁰⁾

兄は、口ではそうでないといいながら、自らが三熙と同類であることを認め、また「ぶざまで」「凶悪な人相」を漂わせている。その「凶悪」は「外悪」の「凶悪」と通じており、⁽³¹⁾「女性的」である。兄と泰日のあいだで三熙はしばし泰日に魅力を感じるが、それは威圧感を伴ったものだった。泰日が士官学校に行く計画であるという話を聞いた三熙は「士官学校はちょっと傑作ね……」と嘲笑するが、この言葉によって作家は自らの立場を明らかにしている。

「従妹——支離한 나의 이야기 (従妹——退屈な日の話) (一九四二・四) には碩熙^{ソク熙}、碩熙の従妹貞媛^{チンウォン}、貞媛が看病をする哲宰^{チルサイ}、碩熙の友人である泰植^{テシク}の四名の人物が登場する。碩熙は数年間監獄暮らしをしてきた人物である。貞媛は学校が休みになっても家に戻らず、雲閑寺という寺から、碩熙に来てくれという手紙を送ってよこす。行ってみると貞媛は病んだ画家哲宰を寺で療養させていた。哲宰の健康が少しずつ回復していくにつれ、貞媛と哲宰のあいだは少々気まぐれになり、碩熙と哲宰がもっと親しくなる。哲宰と碩熙は性格が似たもの同士で、一方が「秋にはあちこち歩きまわろうよ」と言えば、もう一方は「外を歩きまわって何が楽しいのかい」とぶすつと答えて、いつしよに暗くなる人間たちだ。要するに「心の中のひとところに、何によっても消せない大きな穴が一つあいている」状態なのだ。このとき、碩熙の友人泰植があらわれる。泰植は碩熙と正反対の性格である。碩熙は融通がきかず内省的で沈鬱だが、⁽³²⁾泰植は雄弁で開放的で華やかである。碩熙が自己主張は強くても表にはつきり表わさない方であるのにひきかえ、泰植は包み隠さずに表現する。

哲宰も泰植も碩熙も一九三〇年代中盤までは特別な思想運動に関与していた人物であることが暗示されているが、現在の碩熙と泰植は、植民地期末期の対照的な二つの姿勢を代表している。

「泰植が碩熙に」「おまえが山の中で十年暮らしたって、仕方ないじゃないか」

「ほかにやることもない」
「それほど暇か」

これには碩熙も泰植と一緒に笑ってしまった。泰植はすぐに言葉をつづけた。

「とにかく、僕はすぐにソウルに行く。そして、世間と一勝負してみるつもりだ」

「金儲けをする気か」

「そうだ。まず僕から先に生活を始めるべきだと思うんだ」

「墮落するぜ。やめておけ」

「いや。自信がある」

「おまえ、愚かだな」

「僕が愚か者だつていうのかい」

泰植はタバコをつまんで火を点けながら、

「じゃあ、おまえ何だ」

「俺か？ 俺は悪漢さ」

泰植はほとんど吹き出した。

そのあと碩熙は、自由のための勇氣でもないし、流されてはいけなさと力説したが、泰植はなかなか頭を縦にふらなかつた。甚だしくは、碩熙の話は虚栄で、逃避で、自己の弱点の合理化だとまで言った。

(中略)二人の考えには距離がありすぎた。よしんば正しくても誤つていても、一人が情熱と希望を持つようとしているとき、同じ時間と同じ空の下に生きながら、一人にはむしる絶望する心があるというなら、これはどうすることもできない一つの恐ろしい事実であつた。⁽³³⁾

「同じ時間と同じ空の下に生きながら」まったく相反する二つの生きる姿勢があるということが、植民地時代末期のもっとも過酷な時期に作品活動をはじめた池河連の、作家としての問題意識であつた。生きる態度としての希望と絶望は、どちらか一方が真実だとか優れているとか立派であるとか、簡単には言えないものである。

しかし、こうした問題が提起された時期が植民地時代末期であつたことを考慮に入れるとき、もう少し違った読解が必要となってくる。ファシズムが猛威をふるい、病氣、倦怠、暗さ、絶望のようなものが、悪徳とされているこの時期においては、徹底した孤独と絶望を語ること自体が、ファシズムに対する抵抗か、少なくとも非協力の意味をもつからだ。一方、明るく健康的で立派な人生を如才なく送ろうという人物は、目の前のものだけを見て時代の雰囲気⁽³⁴⁾に歩調をあわせ、適応しながら生きる人間群像である。

立派な人生とくだらない人生のうち、ファシズムの時代の作家池河連は、くだらない人生の方に愛情をかたむけて絶望の側を選択し、そちらへと追いやられる人びとの苦痛を描いた。彼らの苦痛は、昇天⁽³⁵⁾を待つイムギに比喩される。

河はまるで、大蟒⁽³⁶⁾が通っていくような恐ろしい姿をしていた。

だが、広大な平野を貫いて無言で流れる河は、じつに見事で豊かな光景だ。⁽³⁵⁾

虚空でのたうつてから遠い山裾にこだまする重苦しい響きは、⁽³⁶⁾あたかも、大蟒⁽³⁷⁾が呻吟しているかのように、暗くて憔悴した響きであつた。

大蟒とはイムギ(イムギ)、すなわち伝説に出てくる角のない龍のことである。呪いをかけられたイムギは

龍になれずに水中に住み、龍になって昇天する日を千年のあいだ待っている。伝説では、イムギは欲心を捨てて龍になることもあれば、修行が足らず天に半ば昇ったところで落下して死んだりしている。そんなイムギが、昇天、するというのは、幽閉された空間から抜け出して世界へと出ていけることだ。池河連の小説で、幽閉されて焦燥しながら昇天を待つ存在としてのイムギは、良心を守りつつ厳酷の時期を生きていこうとしている知識人の自己象徴であり、イムギの重苦しい呻吟は、彼らの凄絶な孤独の悲鳴なのである。このことは次の随筆により明瞭に述べられている。

瞬間、死のように押し寄せる孤独のために、目の前がぐらりとした。耳の中がウォーンと鳴った。それはまるで大鱗が呻吟するような重苦しく暗い響きだった。耐えられない焦燥のために、とうとう私は両手でもがいて誰かを探し求めた。しかし、かたわらには、誰も答える者はなかった。⁽³⁸⁾

植民地時代に発表された最後の作品「羊」には、友人も愛する女性も信用できず、徹底して孤独になった状況が、苦痛に満ちて描かれている。

「馬鹿なやつだ、真つ昼間にまともに叫ぶこともできんとは……」
羊の背に手をぼんと置いたまま、彼はどうしていいかわからなくなつた。どうせ死ぬなら、どんなに痛いか、ちよつとでも叫んでくれたら、かえってすつきりするだろうに。⁽³⁹⁾

どこに入りこんだのか、いきなり道がふさがつて、前には高い丘があつた。少しためらっていると、どこからか、松かさが一つ、雑木のあいだからぼとりと転がり落ちた。(中略)腐りはてて、死んでいる。まるで、瘡蓋^{かさね}だった。いまや、あの巨大で傲慢な大木にはこれっぽちも必要とされなくなつた、おできの瘡蓋、そんなものだった。

前の引用文は「羊」の冒頭部で、虎に食いつかれた羊がなすすべなく血ばかり流している夢を見た成在^{ソンジヤク}が、自分をそれに投影している場面であり、後者は小説の最後の部分で成在が、自分の友人だった晶来と自分が愛していた晶仁の二人から拒絶され、自分を役に立たなくなつた松かさに投影している場面である。きびしさを増す現実の前で感じる無力感と絶望感、そして自己嫌悪がないまぜになつた状態である。成在が「昇天」を夢見るのは、浪漫的な超越というよりも、目前にある現在が「地獄」であることを強調するための反語法である。

ついに彼は深い眠気にすべりこみながら——(それに、そこで「昇天」することになれば最高だし……)——と……友の言葉でも彼の言葉でもない、遠いところの話を、黙って口の中でそらんじてみるのであつた。⁽⁴⁰⁾

この絶望は絶筆へと続いていく。

池河連の植民地時代最後の文章である手紙風の随筆「姫列(姫)」「(新時代)一九四三・七」には、これ以上はもう作品を書くことができないことが、作家自身の悲痛な声と口調で吐露されている。

いまの私は、何ものも誤解しない。何ものも気にならない。ヒバリを求めて、はるかな空を飛びまわるよう

な楽しい心は、もう私には残っていない⁽⁴¹⁾。元^{ウツク}だけでなく、姫、あなたに対しても同じ。あなたがサルマタを穿いて道ばたで酒を売っていたって、私はきつと腹も立てないだろう。姫！ いつの間には私は、こんなに年をとったのかしら。どうして、こんなに目がかすんでばかりなのかしら⁽⁴²⁾。暗闇が押し寄せてきて、いくらがんばって目をこすっても、目の前の松の木一本、まともに見分けられないの。私には、ヒバリはいないというのかしら。あなたといっしょにどこかへ飛んでいったのかしら。私の怒りといっしょに楽しさまで持ち去るなんて、あんまりひどい。

登壇当時、すでに押しつぶされて拘束された片目しかないけれども、それでも目は曇らせまいと誓った彼女だが、いまや暗闇が押し寄せ、なにも見えなくなった状態だということである。それゆえ作家はこれ以上書くことができなかった。つねに、卑屈、よりは、凶悪、を選ぼうとした作家池河連は、このあと作品を発表していない⁽⁴³⁾。

五、植民地主義と女性文学の二つの道

以上で考察したように、植民地時代末期、ともに時局と関わりのないように見える男女間の愛情問題を素材としながらも、崔貞熙小説の女性たちは、強要された〈女性性〉からの逸脱を夢見つつも結局は既存の〈母性〉へと回帰し、一方、池河連の小説に登場する女性たちは、逸脱を最後までつらぬき、それを通して男性の家長意識と偽善を暴露している。このような下地があったところに、国策⁴⁴を宣伝する文学が要求されたとき、崔貞熙は軍国主義の〈母性〉を称揚する方向へと進み、池河連は、外部世界との関わりを断つて自らを幽閉させる憂鬱で病弱な人物たちの内省の世界へとめりこんで、最後は絶筆することで時局に対する非妥協的な姿勢を堅持した。

実際には、崔貞熙は第二次カップ検挙事件と関連して起訴された唯一の女性文人であり、八ヶ月以上も獄中苦勞をなめている。しかし当時の崔貞熙の作品世界と崔貞熙自身の陳述を総合的に見ると、こうした、同伴者の的な行動は、夫であった金^{キム}幽影^{ウイヨン}と彼が標榜していたイデオロギーに順応して取られたものであり、この性向は、植民地時代末期に金東煥^{キムドンファン}との関係に順応して取ることになったさまざまな親日文学活動へとつながっていく。それなりに一貫性があるとはいえ、それは、つねに自分よりも強い対象である男性を中心に置いて思考し、男性による大勢に順応することを美德とみなす女性主義である。このような男性中心主義と現実順応主義が、結局、植民地主義を肯定して積極的な宣伝をおこなうところまで彼女を導いたのであった。

これまで池河連の伝記的な事実では、彼女が有名な左翼文学者林和^{イムハク}の妻で、兄弟全員が社会主義運動の関連で警察署に出入りして懲役刑にも服している点が、主として注目されてきた⁽⁴⁴⁾。しかし、この兄弟たちとの関係だけでなく、池河連が李現郁であった時代に、東京留学生として権友会東京支会の会員であったという点も注目すべきであろう。権友会会員としての李現郁は一九二八年の夏休みに帰国してソウル天道教会館で新幹会権友会東京支会が共同主催した女性問題講演会で弁士として参加し、大衆の前で「現段階の婦人問題」を演説しており、一九二九年には権友会中央執行委員会に選ばれている。こうした活動から見て、李現郁は権友会の熱心な会員で、すでに植民地における女性問題に自分なりの見識をもって活動していたと見られる。そして男性／女性、明朗で強くて豊かな男性性／憂鬱で病弱で生気のない女性性、植民地／被植民地、という関係においては、前者に協力することを拒否し、後者の立場で差異を認識し克服しようという女性作家として立つことになったのである⁽⁴⁵⁾。

このころ池河連が崔貞熙に送った手紙(「肉筆所管」⁽⁴⁵⁾)の中で崔貞熙を非難していることの意味が推しはかれる⁽⁴⁶⁾。

こんなことを言うと笑われるかもしれませんが、あなたには、これまでずっと、大きな孤独と耐えがたい孤独を与えられてきました。私は、何度もわからなくなってしまう、今ではあなたがへんに憎らしくさえなってきました。

(……)

ですが、あなたは私のように愚かではありませんでした。もちろん、私はこんなあなたを、責めることも憎むこともいたしません。むしろ、今あなたがついていこうとしているもの前で幸せで鏡のように明るくあることを祈っているのかもしれない。

(……)

あなたの周りには、私など足元にもおよばぬ賢明な友人が沢山いることを知っているからです。それで、私もただ、あなたのように賢くなってみようとしただけです。

しかし、私の故郷は愚かしかつたのでしようか、私が文章を書くといつて、とても喜んでいたあなた——お互い、書きものをして、いつまでも楽しく一緒にいましょうねと、子供のようにささやいたあなたのことを思い出してやりきれなくなるのを、長いことどうすることもできませんでした。

池河連は自分が愚かで崔貞熙が賢いと言っている。このときの「愚かさ」と「賢さ」は、「愚か」で「凶悪」な顔を持つしかない女と、「卑屈」だが美しく見える女のあいだの選択のことではなかつたらうか。「愚かさ」と「賢さ」はまた、池河連がファシズムを生きぬく知識人の姿勢を問題にした三編の小説において、植民地時代末期を生きる知識人の、対照的な二つの姿勢でもあった。そして池河連は、その「愚か」で「凶悪」に見える女性の顔によって、ファシズムの戦争動員に抵抗しながら植民地時代末期を耐え抜いた。

このように、自身に与えられた生の条件を正面から見すえながら、問題の本質に肉薄する池河連の作家としての姿勢は、彼女がおかれた植民地という現実の本質もまた回避せずに見すえる姿勢につながっている。植民地において、女性としての意識に忠実であれば同時に民族としての意識も明瞭になるということを、崔貞熙と池河連の作品世界を通して知ることができるのである。

註

(1) 具体的には一九三八年七月一日の国民精神総動員朝鮮連盟の創立以降とみなされる戦時総動員体制の時期で、作家の立場からは一九三九年十月二十九日の朝鮮文人協会の創設以後をさす。

(2) 池河連(一九二二—一九六〇?)の戸籍上の本名は李淑姫だが、学校では李現旭という名を用い、池河連は筆名である。慶南居昌の地主の家の庶子として生まれた。小学校を終えて日本に行き、東京の昭和女と東京女子経済専門学校に通ったという。一九二八年ころには権友会東京支会の会員として活動し、一九三四—五年ころ詩人で評論家の林和と結婚して息子を産んだ。一九四〇年、『文章』誌に短編小説「訣別」を発表して登壇し、解放後に創作集「道程」(白揚社、一九四八・十二・十五)を出した。解放後に発表した短編小説「道程—小市民—」(『文学』一九四六・八)は李泰俊の「解放前後」とともに一九四六年の「解

放記念朝鮮文学賞」受賞候補となった。(これは朝鮮文学家同盟が主催したもので、候補作として上がった二編のうち李泰俊の「解放前後」が受賞した)。解放後は朝鮮婦女総同盟の文教部員としても活動した。創作集「道程」が出たころに北朝鮮に渡ったらしく、一九六〇年ころ病死したという説がある。池河連の生と文学については張允英の「池河連小説研究」(祥明大國文科碩士論文、一九九七)を参照。そのほかに丁英鎮の「悲運の女流作家池河連——夫林和の分身として破滅した未完の文学の一生」、『痛恨の失踪文人』(文以堂、一九八九)と徐正子編「池河連全集」(平昌思想、二〇〇四)の概説「暗い時代と倫理感覚」がある。

(3) 朴花城は全羅南道木浦の金持と再婚して木浦で大家族を切り盛りするため創作活動はしておらず、姜敏愛は病気が悪化し、白信愛は一九三九年に病死した。

(4) このような女性作家の系譜に関しては、李相瓊、「一

九三〇年代女性作家と新女性の系譜研究については、『女性文学研究』二二(二〇〇四・十二)を参照。

(5) 李善熙、任淳得、池河連は解放と戦争期に北側を選択したため、一九九〇年代の南韓文学史では消されてしまいい、張徳祚は大邱に住んでいたがソウル中心の文壇と遠ざかっていたため、この傾向はますます強まった。

(6) 任淳得(一九一六?)については、李相瓊の「任淳得の小説『名付親』と植民地時代末期の女性文学」(『女性文学研究』八、二〇〇二・二十三)と「植民地における女性と民族の問題」(『実践文学』六九、二〇〇三)を参照。

(7) 池河連の小説と随筆作品は「道標」をはじめ大部分が徐正子編『池河連全集』に収められているが、座談「男性爆撃座談会」(『新世紀』、一九三九・九)と随筆中「나의 거문고——子息에 대하여」(『女性』、一九三九・四)、「病床斗読書」(『新時代』、一九四一・九)、「몽길치」(『新時代』、一九四一・十二)、「姫列」(『女性』、一九三九・四)は収録されていない。

(8) 傍線を引いた作品は親目的という評価を受けているものである。

(9) 作品集『道程』に収められたこの作品は初出が確認されていないが、諸状況から見て解放後ではなく、このころ書いたものではないかと推定される。

そのように迂回して書く戦略が必要とされる時代でないことも、また明白である。このことは、崔貞熙の創作過程を通時的に見れば、前後の論理関係によってより明らかとなる。

(12) 通時的な観点から崔貞熙の作品を分析した研究としては、李相瓊、「植民地時代末期の女性動員と「軍國の母」」(『フェミニズム研究』二、二〇〇二・十二)、「서영인, 「順応的女性性と国家主義」, 民族文学研究所編, 『脱植民地主義を超えて』ソウル: 소명출판, 二〇〇六)がある。

(13) 西洋に対する批判が作品にうまく溶け込んでおらず、子供の意志に従うという形式になっている。

(14) これらの作品に関する詳しい論議は李相瓊の「植民地時代末期の女性動員と「軍國の母」」(『フェミニズム研究』二、二〇〇二・十二)を参照のこと。

(15) 『国民文学』一九四二年十一月号、一四三〜一四六頁(日本語原文のまま―訳者註)

「地脈」では夫、「人脈」では友人の夫である허운, 「野菊抄」では、私を捨てた男である。実生活で崔貞熙が金幽影に対する憎しみを生んだ息子に発散した辛い経験がこのような文章を生んだのであろう。だが個人史を理解することと作品解釈は別の問題である。

(16) 任淳得の「弘暎期の朝鮮女流作家論」(『女性』、一九

(10) 「靜寂記」(日文)は、一九三八年一月の『三千里文學』に発表したものを抜粋して翻訳したもので、計算に入っていない。

(11) 一九三〇年代の「女流文学論」では、崔貞熙小説のこのような女性告白体と母性第一主義に回帰する人物の性格に見られる〈女性性〉が称賛されたが、一九九〇年代になると、崔貞熙作品の〈女性と母性の葛藤における母性の勝利〉という結末に注目して、崔貞熙作品は母性中心の女性観を擁護しているという批判的な見解が台頭した。それと同時に、〈母性〉に回帰するという表層の物語の内部には他の男に対する逸脱した愛情が描かれているという点を取り上げて、これを崔貞熙の女性的創作の戦略として評価する。「女性的創作論」からのあらたな見方、あるいは、〈女性と母性の葛藤〉の部分に注目して、既存の保守的な女性観に亀裂をいれた意義を評価するという見解もあらわれた。(박정애)だが、こうした論議は、〈女性と母性の葛藤〉を主題とした同時代の他の女性作家たちの創作姿勢と比較しながら、その適切性を論ずるべきであろう。これより約二十年前に羅憲錫がすでに敢行していた家族からの脱出(정희)と〈母性〉の解体(母性感想記)と比較するとき、崔貞熙の退嬰は明らかである。そのほかに、この時代の他の作家の作品を見れば、この種の葛藤を描くために

四〇・九)は、「天脈」がまだ発表されていない時期に「地脈」と「人脈」を論じたものであるが、崔貞熙のその後の作品世界までも予見したことになる。

(17) これに関する詳しい論議は、李相瓊の「植民地における女性と民族の問題」(『実践文学』六九、二〇〇三巻)を参照。

(18) この随筆は、徐正子編『池河連全集』(푸른사상, 二〇〇四)に入っていないので、全文をここに提示しておく。밖에 나가지 않으니 무슨 이렇다 할 좋은 포부가 있을라 없는게고 그저 기껏해야 집안에 대한 것이나 애들에 대한 것이 아니면 바깥분에 대한 말이겠는데 바깥분에 대한 이야기는 자칫하면 주책없기 쉽고 살림이나 애들에 대한 것도 내가 무슨 그리 터이 높아서 남이 간수해야 할 좋은 주장이 있겠습니까만 그래도 큰이 하라시면, 애기, 료어떻게 적당하게 보살렸으면 좋겠다는 것인데, 이진만 게 아니라 애기를 하대하고서도 좋은 개성을 가졌다고 자랑하는, 어머니, 가 되어도 딱한 일이고, 반대로, 우리 애기, 라면 그만 안고 지고 눈물을 흘리고 하는 허다한 신식 어머니들에게서, 흔히 野蠻人の 母性이 보이는 것 같아서 될 수 있으면 어머니들은 특별히, 우리 애기, 라고 해서 과장을 하지 말고 그저 병나잠게 해주고 쓸쓸해하지 않게 해줄 정도면 무엇이고 좋지 않을까 생각하옵니다. (池河連, 「나의

거문고——子息에 대하여, 『女性』, 一九三九・四)

(19) この座談は『新世紀』一九三九年九月号に掲載された。座談会の参加者は次のように紹介されている。朝鮮日報社／李善熙、学芸社／崔玉嬪、林和氏夫人／李現郁、新世紀社／郭行瑞、新世紀社／李周洪。末尾の二人は男性で、話題をなげかける司会者の役割だけ果たしている。

(20) 鄭泰鎔、「池河連斗 小市民——新刊評을 代身하여(池河連と小市民・新刊評にかえて)」、「婦人」、一九四九・二、三合併号)には、「愉快な女人(池河連を指す—引用者)の高い声が日本語、西洋語、朝鮮語まざりあつての熱弁、達弁、速弁で、鼓膜が破れそうだった。女人の雄弁は男性を虜にし、とうとう黙り込ませてしまい、ほとんどの男性は反論しないでただ愉快に笑うばかりであった」という箇所がある。このほかにも、池河連が闊達でよく話す人だったという何人かの知人の回想がある。

(21) 『男性爆撃座談会』で池河連は、男性の自己中心主義のために、男女関係においては女性側が「つねに苦しんで平和を維持している」のだと話している。池河連は実生活で夫の周囲にいる女性たちのことで苦しむことが多かったという。

(22) 「従妹」では、승업다、という表現を使っている。碩熙が泰植を拒否した妹貞媛の姿を思い描いたときの単語で

ある。「ふと媛の姿が目に見えかんだ。あいかわらずきゃしゃで、恥ずかしそうに人を見つめる澄んだ目の顔だ。だが次の瞬間、もう一つの姿が浮かんだ。なんとこの不快な姿だ。吝嗇というよりはむしろ貪欲なその容貌は、どう見ても、승업음、だった」ここでの「貪欲」や「승업」は、自分の欲望に忠実で男性に振り回されずはつきりと自己主張をする女性を描写する単語である。

(23) 「산길」(『春秋』一九四二・三)、一四六〜一四七頁

(24) 「從妹」の副題である。

(25) 「인사」(挨拶)、「隨筆」, 『文章』, 一九四一・四

(26) この小説に出てくる月影洞や山湖里という地名は、池河連の故郷の村で、実際に兄たちが住んでいたところである。長いこと監獄にいた兄の出獄や、三熙が子供を置いて療養に行くことなどは、池河連の実生活とほとんど重なっており、この点で「滯郷抄」は自伝的要素の強い小説といえる。

(27) 「答えようもなく」(대처없이) 對誰? 對策? あるいは、대답할말、ほどの意味と見られる。

(28) 「滯郷抄」, 『文章』, 一九四一・三、一八頁

(29) 「そのうえまた故郷を離れて」(그러면서 또 상구고향을 단테두어) 상구는 아직의 方言。

(30) 「滯郷抄」, 『文章』, 一九四一・三、二二〜二三頁

(31) この小説では、兄の口を通して、卑屈というのは「不良や破廉恥とは違って、正しいことは正しい、間違つたことは間違つていると言えないこと」だと、より明瞭に書いている。(前掲書一頁)

(32) 「碩熙は融通がきかず内省的で沈鬱だが」(碩熙는 주변이 없고 内省的이고 沈鬱한 반면) 주변は주선や世畧をすること、あるいはその才能。

(33) 「從妹」, 『道標』, 백양당, 一九四八・十二、二五三〜二五四頁

(34) 「從妹」の碩熙と泰植の関係は、解放後の小説『道標』においては석재と기철の關係としてあらわれる。기철は解放前には金を稼ぎまわっていた人物だが、解放になると進んで党を組織し、석재はそんな彼に対して不快感をいだく。기철は解放前の小説における泰植(「從妹」)や泰日(「滯郷抄」)と同じ類型の人物である。

(35) 「滯郷抄」, 『文章』, 一九四一・三、二七頁

(36) 「遠い山裾にこだまする重苦しい響き」(어느 먼 산기슭에 머처지는 肉重한 音響) 머처다は머물게 하다는 方言。

머처지다는머아리처다のような意味と思われる。

(37) 「從妹」, 『道程』, 二六三頁

(38) 「回甲」, 『新時代』, 一九四二・九

(39) 「羊」, 『春秋』, 一九四三・五

植民地主義と女性文学の二つの道(李)

(40) 「羊」, 『春秋』, 一九四三・五、一七〇頁

(41) 「もう私には残っていない」(상기 내게 남았을 리가 있느냐) 상기는 아직의 方言。

(42) 「こんなに目がかすんではかりなのかしら」(이렇게 눈이 잠복호리기만 하냐) 잠복은 잔뜩の方言と思われる。

(43) この時期の紙面をすべて確認したわけではないので断言は難しいが、最後の小説と隨筆の雰囲気からして、この推測は十分可能である。万が一新しい作品が発掘されても、これ以前と違う方向の作品である可能性はほとんどないであろう。孤独と絶望による自己幽閉と現実逃避であったがゆえに、解放以後に書いた「道程」では、立派な人生を求めて体制への動員を自ら招来した「卑屈」な人間たちを批判する一方で、自嘲的に傍観した自身をも「悪徳」であったと自己批判したのである。

(44) この点で、「滯郷抄」, 「從妹」, 「羊」に登場する兄と妹は、池河連とその兄との関係を投影したものと読むことができる。そこでの兄たちは、出獄してから、病弱だが良心を守って生きようという強い意志をもった人物であり、同じ過去をもちながらも、世間の変化に合わせて妥協し、生活を求めていく昔の友人と対比されている。妹は、病弱だが良心を守ろうとする者と、健康で生活と華麗に妥協する者とのあいだで葛藤するが、結局は兄と同じ場所に

立って、自尊、自虐、自己憐憫の複雑な感情を見せる。これまでの池河連研究では、長兄の李相祚(一九〇五〜?)の社会主義活動だけが注目されていたが、すぐ上の兄の李相北(一九〇七〜)も朝鮮共産主義者協議会の釜山慶南代表部事件で一九三一年に検挙され、一九三三年の裁判で懲役三年の宣告を受けて一九三五年末頃に出獄している。李相北の嫌疑には第一次カッブ検挙事件の高景欽に出版資金を支援した罪が入っている。弟の李相鮮(一九一三〜?)も一九三〇年と一九三五年の二度にわたり検挙され、それぞれ懲役一年ずつの宣告を受けている。姉の李容姫(一九〇八〜?)も、夫の事件と関連して調査を受けた記録が残っている。

(45) 徐正子編『池河連全集』、二四五〜二四六頁

(46) 池河連と崔貞熙は個人的には相当近い間柄で、互いにやり取りした手紙が当時の紙面で発表されたこともある。崔貞熙の遺品のなかには池河連が送った手紙が残っていた。この「肉筆書簡」は紙面に発表されたものではなく、崔貞熙の死後に公開された私信である。発信や受信の日付

がないこの手紙がいつ書かれたものであるかは不明だが、徐正子教授は、池河連が「訣別」で登壇した直後のものと推測している。それによると、崔貞熙が池河連の家庭のこと——友人が自分の夫を愛していること——を素材にして書いた「人脈」で、愛人を擁護して正当化するような書き方をしたことを池河連が責め、それに対抗して自分なりの「訣別」を書いたことで葛藤が生じたという。この点で、崔貞熙の「人脈」は、愛人の叙事であり、池河連の小説は、妻の叙事、だと徐教授は述べている。しかし、愛人であれ妻であれ、このような解釈は男性を中心に置いて思考するものであり、池河連の本意とは距離がある。池河連の「訣別」を読めば、主題は、一人の男性をめぐる二人の女性(妻と愛人)間の問題ではなく、二人の女性の両方に対して誠実とはいえない男性(夫)の自己中心主義と卑屈が問題とされているのである。その点では、むしろ男性の愛人や妻ではなく(女性)が主体の(女性の叙事)とするべきであろう。

(本研究は、第五十七回朝鮮学会大会において発表されたものである。)

(韓国科学技術院人文社会科学学部教授)